

# 尊重する時代

藤岡市立東中学校

三年 竹市 摩耶

「多様性」この言葉を最近よく耳にします。皆さんは、この言葉の意味を知っていますか。辞書で調べると「ある集団の中で異なる特徴・特性をもつ人が共存すること」とあります。具体的に言うと、人種や民族、性別、宗教、価値観、障碍の有無などが異なる様々な属性の人材を迎え入れ、共存しながら、それぞれがもつ能力や考えを活かす取り組みをすることでそれらを尊重することを言うようです。

つまり、自分と違う人も受け入れ、共に生きていきましょう、というこの「多様性」という言葉。素晴らしい言葉であるはずなのに、最近とても便利に使われている気がするのです。先日、SNSで中学生が定期試験を受けなかった話を笑い話のように投稿し、「多様性の時代だから受

けない選択をした」と文章が添えられているのを見ました。また、四月に就職したばかりの新社会人が、服装を指摘され、「多様性が認められなかった」とすぐに辞めてしまったというニュースも見ました。これらに使われている「多様性」は使い方を少し間違えていると思うのです。自分の我が儘、好みを通すための口実に「多様性」を利用しているだけではないでしょうか。これでは、朝眠いから遅刻をするのも多様性、制服を着たくないから私服で登校するのも多様性。この言葉のおかげでやりたい放題の生活になってしまいます。そして、多様性を尊重する時代のはずが、いつの間にか多様性の肯定が強要される時代になってしまっていると感じます。そこで私は、「本当の多様性」について考え直す必要があると思いました。

中学三年生になる春休み、私はオーストラリアで十日間のホームステイをしてきました。オーストラリアは先住民と移民が共に暮らす国で、白人も黒人もアジア人もいます。私がホームステイをしたご家庭も、一軒目はオーストラ

リア人のご夫婦、二軒目はオーストラリア人と日本人のご夫婦でした。宗教はキリスト教徒が多い中、イスラム教徒、仏教徒もいます。ホームステイ先の子どもたちと現地の学校に通いました。外見が違う子供がたくさんいましたが、すでに当たり前のように互いを認め、一緒に生活していました。ホームステイ中、イースターというキリストの復活祭があり、家族で過ごす大切な時間にもかかわらず、キリスト教徒でない私と過ごしてくれました。日本よりも当たり前のように他人種を認め、他宗教を認め、互いの生活を尊重していることを感じました。しかし、彼らは決して多様性が当たり前だから自由で良いとは思っていません。互いを認めながらも、規則は守っています。自分の人権を守るために、相手の人権も守るのです。

このように「本当の多様性」とは、自分とは異なる相手の特徴を無視せず、受け入れることだと思います。自分から多様性の時代だからこうでいいでしょうと主張することではないのです。互いに認め合うのだから、それぞれ自由に

動いていい、それではいつまでも社会はまとまりません。それぞれがもつ価値観、考えを共有し、「その考えもあるよね。じゃあどうしようか」とみんな考えてみる。認め合って話し合って解決していく。そして自分になかった考えを取り入れ、視野が広がる。「本当の多様性」とはそういうことだと思います。他者と自分との共通点や相違点を見つけ、一人一人の個性として認め合い、尊重しあっていききたいものです。個性が尊重され、窮屈なルールがなくなり、自分を表現できることは、全ての人にとって生きやすい社会への変化に違いありません。長い時間をかけて変化してきた社会は、誰もが守らなければならぬ規律を大事にすることで、さらに生きやすい社会の実現に繋がります。実現していくのはこの時代に生きる私たち。私はそういう社会を創りたい。みんなが互いを尊重し合える時代を創っていきませんか。